第二章　大君の物語　大君、中の君を残して逃れる

［第一段　一周忌終り、薫、宇治を訪問］

御服など果てて（一周忌法要が終わり、御服喪期間も過ぎて）、脱ぎ捨てたまへるにつけても（喪服を脱ぎ捨てなさるにつけても）、かた時も後れたてまつらむものと思はざりしを（ずっと父宮に死に後れ申そうとは思っていなかったので）、はかなく過ぎにける月日のほどを思すに（早く過ぎ去る死後の月日を思うと）、いみじく思ひのほかなる身の憂さと（思った以上に心細い身の上だと）、泣き沈みたまへる御さまども（泣き沈みなさる姫君御二人の姿は）、いと心苦しげなり（ひどくお労しいものでした）。

月ごろ黒く馴らはしたる御姿（幾月も黒い喪服を着慣らしていらっしゃった御姿は）、*薄鈍にて（除服後の今も忌月の九月いっぱいはうすねず色の喪服姿でいらして）、いとなまめかしくて（とても風情があり）、中の宮は、げに*いと盛りにて（妹君はなるほど盛りの年頃で）、うつくしげなる匂ひまさりたまへり（つやつやと美しさが際立っていらっしゃいました）。　*「うすにびにて」は注に＜除服の後は平服に戻るの普通だが、姫君たちはなお志厚く薄鈍色の喪服を着用している。＞とある。ただ、「除服の後」といっても、その後ずっとという意味よりは、下に「つつみきこえたまひし藤の衣も改めたまへらむ長月も」とあり、忌月とされたらしい九月いっぱいを追善服喪していた、と読んで置きたい。　*「いと盛りにて」とあるが、妹姫は 24 歳、姉姫は 26 歳で、当時の適齢意識からすると既に盛りを過ぎていたかと思うが、未婚の深窓令嬢なら現代人に近い生活環境での年齢状態だったのかも知れない。

御髪など澄ましつくろはせて*見たてまつりたまふに（妹君の御髪を洗い整えさせて見直し申しなさると）、世の物思ひ忘るる心地してめでたければ（姉姫には世の憂さも忘れられる気がして晴れやかなので）、人知れず、「*近劣りしては思はずやあらむ」と、頼もしくうれしくて（内心で、この姫なら中納言殿に近付き申しなさっても見劣りする女のようには思われないに違いない、と張り合いもあり面目も立つと）、今はまた見譲る人もなくて（今は他に妹の面倒を任せられる人も無いので）、親心に*かしづきたてて見きこえたまふ（姫は妹を親代わりとなって御世話申して中納言殿と結婚させ申そうと思い申しなさいます）。　*「見たてまつりたまふに」の「奉る」の謙譲語と「給ふ」の尊敬語の合わせ語用から、是が＜姉姫が妹姫に～して差し上げる＞という言い方になっている。　*「ちかおとりしてはおもはずや」は非常に興味深い。是は、姉姫が自身を＜近劣りして思はす＝近目では見劣りすると思われた＞という劣等感に苛まれていることを示している。やはり、王家の誇りだけではなく、傷付き易い女心、それも山里暮らしで元々劣等感を抱いている女心を刺激して、薫中納言の勿体付けは、姫をとてつもなく遣る瀬無い立場に追い遣ってしまったようだ。　*「かしづきたてて」の「立つ」は他動詞の＜形を付けさせる→結婚させる＞だろう。

*かの人は（その姉姫が妹君に譲り申しなさった心算の、薫君納言殿の方は）、*つつみきこえたまひし藤の衣も改めたまへらむ長月も（忌月ということで姫君たちが喪服のままでいらっしゃった九月中にも）、静心なくて（逸る気持ちに落ち着きも無く）、またおはしたり（一周忌法要から日も置かず、またお見えになりました）。　*「かの人」は注に＜薫をさす。＞とある。確かに文意からしてそうらしいが、此処で中納言を「かの人」と呼ぶ意図は何か。先ず一つは、上文の話題に関連して「かの」という指示語が使われるのは、是が姉姫の目線での場面説明地文である事を示しているのだろう。そして、「この」「その」よりも

更に遠い「かの」という指示概念は、姉姫にとって中納言はもう全く自分とは関わりの無い人と突き放して考えている、または考えようとしていることが示され、そうすることで姉姫は冷静さが保たれている精神状態である、という事も作者は示しているようだ。が、現代語文では、此処まで客観的に「中納言殿」と呼称して来た人物を、それが必然となる場面設定の限定も無しに「かの人」と呼ぶ語用はない。で、それなりの補語が必要となる。　*「つつみきこえたまひし藤の衣も改めたまへらむ長月も」は注に＜『完訳』は「その喪服を改める九月の到来を待ちかねた。九月は忌月で結婚がはばかられる。命日の八月二十日ごろから、日数をおかずに訪ねたことになる」と注す。『河海抄』には「男女初会合忌正五九月云々」とある。＞とある。

「例のやうに聞こえむ(この前の時と同じようにお話しもうしたい)」と、また御消息あるに(と中納言殿から姫に、またご挨拶があるが)、*心あやまりして(姫君は非常に動揺して)、わづらはしくおぼゆれば(厭だったので)、とかく聞こえすまひて対面したまはず(とにかく不調を訴えて対面申しなしませんでした)。　*「心あやまり」は＜思い違い＞という語用もあるようだが、古語辞典には＜乱心。狂心。＞とあり、「心あやまりして」は平静さを保てないほどに＜動揺して＞という言い方、かと思う。

「思ひの外に心憂き御心かな(何と情けない御心か)。人もいかに思ひはべらむ(誰も何とも申しませんのか)」と、御文にて聞こえたまへり(と中納言はお手紙で不満を申しなさいました)。

「今はとて脱ぎはべりしほどの心惑ひに(喪中期間が済んだからと喪服を脱ぐという型通りのことでは亡き父宮への哀悼の念が消えない落ち着かない気持ちで)、なかなか沈みはべりてなむ(却って気が塞ぎまして)、え聞こえぬ(お話し申せません)」とあり(と姫のお返事がありました)。

怨みわびて(中納言殿は嘆き困って)、*例の人召して(いつもの弁の君を呼び出しなさって)、よろづにのたまふ(不平やら今後の手立ての相談やらを仰います)。　*「れいのひと」は注に＜弁の君をさす。「例の人」で一語。＞とある。中納言の苛立ちを表現しているのだろうか。だとすれば、「よろづに」は＜不平やら相談事やら何かと＞だろうか。

世に知らぬ心細さの慰めには(他に頼るべき人を知らぬ心細さの慰めに)、この君をのみ頼みきこえたる人びとなれば(この中納言殿だけを頼りに思い申している女房たちなので)、*思ひにかなひたまひて(姫が中納言殿と結婚なさるという、自分たちの希望に適いなさって)、世の常の住み処に移ろひなどしたまはむを(世間並みの都住まいに移住なさるのを)、いとめでたかるべきことに言ひ合はせて(とても結構なことと話し合って)、「*ただ入れたてまつらむ(とにかく中納言殿を姫の御部屋にお入れ申し上げたい)」と、皆語らひ合はせけり(と皆で示し合わせていたのです)。　*「おもひ」は「御」の敬語遣いがないので、薫君や姫の気持ちではなくて、女房たちの＜希望＞らしい。　*「ただ入れたてまつらむ」の「ただ」は＜ひたすら→とにかく→何とか＞という副詞語用だろう。

[第二段　大君、妹の中の君に薫を勧める]

姫宮、そのけしきをば深く見知りたまはねど(姫君はその女房たちの示し合わせがあることを深く見抜いていらしたのではないが)、

「かく取り分きて*人めかしなつけたまふめるに(中納言殿はいつも今日のように特別に弁の君を相談相手と見込んで手懐けていらっしゃるようなので)、うちとけて(折り入った話で)、う

しろめたき心もやあらむ(私たちの寝所に中納言を招き入れるような、謀をしているかもしれない)。　*「人めかす」は＜人並みに扱う。一人前に待遇する＞などと辞書にあるが、此処では＜人向かす→その人と見込む→取次を頼む＞という語用かと思う。姉姫は前回の中納言との面談で、弁の君に騙された、みたいな思いもありそうだ。

昔物語にも、*心もてやは、*とあることもかかることもあめる(昔話にも女が自分の気持ちで男を招き入れて情交に及ぶとは限らない)。　*「心もて」は＜自分の気持ちで＞。「やは」は反語表現の係助詞とのことだが、結びが「こともあめり(～であることもあるようだ)」と非断定の可能表現なので、その打消しも＜～ではないこともあるようだ→～とは限らない＞という可能表現になるだろう。 *「とあること」は＜男を部屋に引き入れる＞で、「かかること」は＜情交する＞だ。

うちとくまじき人の心にこそあめれ(油断ならないのが女房の手引きなのだろう)」と思ひよりたまひて(と思い至りなさって)、

「*せめて*怨み深くは(直対面に応じない私の頑固さを非難する不満が深くて、女房の手引きで無理に中納言が部屋に押し込むなら)、*この君をおし出でむ(妹を代わりに直対面に差向けるとしよう)。　*「せめて」は＜しいて、どうしても＞という副詞語用ではありそうだが、是は「怨み深し」を修辞するものではないだろう。「せめて」と「深し」が重複するのは変だ。どうやら、この文は変則構文で、「せめて」は上文を受けて＜強引に女房が手引きして＞の具体意を持ち、下に＜さるは＝そうなるなら＞などが内意され、「怨み深く」は挿入説明意を示すので、このままで校訂すれば「せめて、恨み深く、は」であり、通常構文なら＜怨み深くて、せめてさるは＞という文意なのだろう。　*「怨み深し」は、本来は前置すべき挿入句と私は見做すが、この「うらみ」は決して一般語用ではなく、中納言の「うらみ＝不満」であり、「せめて」は中納言が「責む(非難する)」という掛詞の洒落語用にもなっているのだろう。それにしても、いくら姫の内心思考文とはいえ、中納言に援助者に対しての敬意を示すなら、必ずや「御怨み」と言う筈だ。だから「御」がない「怨み」は、中納言と対等の一方の当事者としての立場でものを考えているとも言えるが、それは今が一時的に別の局面に変わるまでの間の保留期間に当たっているという事情からであって、あえて「御」を付けないという意図があると見れば、それこそ姫の＜うらみ＞が込もった語用に聞こえる。で、その姉姫にとっての＜うらみ＞を見直すと、一章七段の、情事が無いままに朝を迎えた前回の対面場面に於いて、中納言が「何とはなくて(世間で言う夫婦などという形にとらわれず)、ただかやうに月をも花をも(ただこのように二人睦まじく月や花を)、同じ心にもてあそび(同じ気持で愛でて)、はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき(遣る瀬無い人生を慰め合って暮らしたいものですね)」と気楽に友人になれたかの親しさで姫に語りかけたことに対して、姫は「かういとはしたなからで(夫婦でないなら、このように身内のように顔を曝した他人への礼を失した形ではなく)、もの隔ててなど聞こえば(几張越しなどの顔を隠した他人を敬う形でお話しできれば)、真に心の隔てはさらにあるまじくなむ(見せ掛けの真似事の親しさではなく、本当に本心から隠し立てを全く無くせるかと)」と身内でも夫婦でも無い男女が顔を曝して会うことの不都合さを、無礼だとはっきり応えていたのであり、その姫の負担感を汲めば、この「怨み」は＜無礼なる直対面に応じない私の頑なさに対する中納言の不満＞ということになりそうだ。　*「この君をおし出でむ」は、この一文だけでは、妹に犠牲を強いるかのような言い方に聞こえるが、姉姫の心理は相当に複雑のようで、その真意が以下に語られるのだろう。

劣りざま*ならむにてだに(見劣りしているのであろう私にさえ)、さても見そめては(あのように親しく見知りあった以上は)、*あさはかにはもてなすまじき心なめるを(疎ましくはせずに血縁兄弟のように接する心算らしいので)、まして(まして私よりは見映えする妹を)、ほのかにも

見そめては(少しでも見知ったなら)、慰みなむ(中納言はきっと気に入るだろう)。　*「ならむ」は、客観状態を示す助動詞「なり」の未然形「なら」に、可能ないし妥当の判断意を示す助動詞「む」の連体形が付いた言い方で、此処では話者である姉姫自身のことを指すのだろう。　*「あさはか」は＜軽々しいさま＞だが、この語用はとても複雑だ。というのは、姫の価値観と中納言の価値観は相容れないものとなっており、此処で言う「もてなすまじき心」は中納言の判断なので「なめる」という推量表現になっていて、この「あさはか」と形容される事柄の中身を見直しておかないと、姫がこういう言い方をする意図を見誤りかねないし、そも文意が分からない。で、「あさはか」の対象体だが、是は中納言が言った「何とはなくて(世間で言う夫婦などという形にとらわれず)」「はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき」という「もてなし」であり、それは姫にとっては「かういとはしたなからで」と遠慮すべき＜「あさはか」さ＞なのであって、此処の＜「あさはか」ならず＞という文意はあくまでも中納言の価値観での＜親身さ＝兄弟のような親密さ＞を言っていることになる。しかし、当代の色男と、実の兄弟でもないのに兄弟のように接するだけ、という情事抜きの女の廃れに甘んじるくらいなら、いっそ出家した方が増しだと女王は思うのだろう。で、自分は出家すれば良いとしても、妹の世話を中納言に頼みたいし、中納言も妹なら自分よりも美しいので嫁に迎えてくれるだろう。そのほうが妹も幸せになるだろうし、中納言にとっても世話のし甲斐もあるだろう。それで万事収まる、と考えたらしい。

*言に出でては(こういう話を口で言ったのでは)、*いかでかは、ふとさることを待ち取る人のあらむ(どうしても急にそんなことを承諾する人は居ないようだ)。　*「ことにいでては」は姉姫の代わりに妹姫が面談することを中納言に告げる、ということらしい。分かり難い主語、対象語の省略だ。　*「いかでかは～あらむ」の反語文型は将来予測ではなく、「ふと」を打消すことの妥当意を示す論旨の助動詞「む」の語用らしい。下に、既に中納言にはその筋を弁の君を介して打診したが断られた、かの説明がある。が、当文も下文も非常に分かり難い文で、注釈で文意を取って読み返しても、もう少し判り易い言い方がありそうに思えてならない。

『*本意になむあらぬ(それは私の考えとは違う)』と、*うけひくけしきのなかなるは(と弁の君を介しての姫のそうした意向の打診に、中納言が承知する様子が無かったようなのは)、*かたへは人の思はむことを(少なからず、中納言の私への気持ちが)、あいなう浅き方にやなど(いい加減なものだったのかと疑われるのを)、つつみたまふならむ(避けようとなさってのことなのだろう)」　*「本意(ほい)」は＜もとからの考え。本来の意志。本懐。本望。＞などのような、深い考えや大きな目標を言う一般語用が大辞泉に説明されているが、この「本意になむあらぬ」が中納言の返事をそのまま引用したものだとすれば、中納言が＜私の考えとは違う＞と言ったことになる。薫君の考え方が固まる経緯は椎本巻にもあったように思うが、当巻に於いても実際に、薫君は一章三段で弁の君に「我も人も世の常に心とけて聞こえはべらばや」と姉姫との婚意を打ち明け、「宮の御ことをも、かく聞こゆるに」と匂宮と妹姫との縁談も進めたいと相談しており、同二段では姉姫にも直接それらしい打診もしていた。が、同時に弁の君からは、匂宮が姫君たちを本気で相手にしているとは思えず、薫君には妹姫を添わせたく、自分自身に婚意は無い、という姉姫の意向も薫君に伝えられていた。　*「うけひくけしきのなかなるは」は注に＜薫は弁の君から大君が中君をという意向を聞かされたが、同意しなかったという話は、の意。「なかなる」の「なる」は伝聞推定の助動詞。＞とある。そのまま従いたい。　*「かたへは」は古語辞典に＜理由を推測して「なかばは」の意。＞とある。「かたへ」が「片方」と表記されることからすると＜ある面では、あるいは＞みたいな語感なのかも知れない。ただ、此処の文意から「理由を推測して」という言い方になる副詞は＜こういう面はある→少なからず＞くらいが馴染みそうだ。「人の思はむこと」は＜中納言の姉姫への思い＞らしい。

と*思し構ふるを(とお思いになって、姉君は中納言の入室に自分は逃げようと算段なさるが)、「けしきだに*知らせたまはずは(妹にその事を知らせ申して置かないのは)、罪もや得む(罪になるだろう)」と、*身をつみていとほしければ(と自分の中納言との面談体験からして妹が戸惑うのも心配なので)、よろづにうち語らひて(事前にいろいろと話し聞かせて)、　*「おぼしかまふる」は注に＜中君と薫の結婚を計画する。＞とある。が、「構ふ」はこの場合、身構える、腹積もりをする、くらいの言い方かと思う。姫はあくまでも受身であり、中納言が女房の手引きで部屋に入って来てしまった時に、妹を身代わりにして自分は逃げよう、という「計画」だから、自分から仕掛ける意味での「計画」ではない。　*「知らせたまはず」の「給ふ」は話者である姉君が妹君に言う謙譲語らしい。　*「身を抓む」は＜わが身をつねって人の痛さを知る。自分に引き比べて人に同情する。＞と大辞泉にある。今で言う＜身につまされる＞だろうか。他人の事情が自分の実体験に照らして具体的に想像できる、ということなのだろうが、自分と他人が全く同じ事情になったり、同じ考え方をするとは限らず、難しい事態に困惑する、という事情への実感になりそうだ。

「*昔の御おもむけも(亡き父宮の御意向も)、世の中をかく心細くて過ぐし果つとも(日々の暮らしをこのような貧しさで心細く過ごして終わろうとも)、なかなか人笑へに、かろがろしき心つかふな(なまじ人に笑われるような軽々しい縁談に身を任せずに、独身で通せ)、などのたまひおきしを(など仰っていらしたのを)、おはせし世の御ほだしにて(ご存命中の足手まといになって)、行ひの御心を乱りし罪だにいみじかりけむを(仏心修行の御心を乱した罪さえ重いので)、今はとて(御遺言として)、さばかりのたまひし一言をだに違へじ(そのように仰せになった言葉の一言さえも背くまい)、と思ひはべれば(と思い申せば)、心細くなどもことに思はぬを(暮らしの貧しさなどは何とも思わないものを)、この人びとの、あやしく*心ごはきものに憎むめるこそ(女房たちがそういう私を、偏屈な強情者と思って困っているようなのが)、いとわりなけれ(実に心外です)。　*「むかし」は＜故人＝故宮＞。「むかし」は「向かひし方＝いにしへ」と同じような言い方、と古語辞典に説明がある。が、向かひ河岸＝彼岸、という語感もある気がする。　*「こころごはし」は＜強情だ＞とあるが、その形容対象は＜姫が独身でいること＞なので、「心ごはきものに憎むめる」は姫自身＝話者が＜強情だ＞と女房が思っている、ということだ。この文は、だから女房たちが中納言を部屋に通してしまいかねない、という意味だと読者には分かるし、それが肝心な事なのだから、現代文ならその事をこそ、妹にきちんと伝えたかどうかが問題になるが、この物語では、こういう言い方で子細を話した、ということになるらしい。かと思えば、やはり肝心な事が伝えられていなかったような場合もあったような気もして、どうも馴染めない。

げに(現にあなたも)、さのみやうのものと過ぐしたまはむも(そのように独身のままで過ごしてゆくお心算なのも)、明け暮るる月日に添へても(年を追う毎に)、御ことをのみこそ(あなたの人生が)、あたらしく心苦しくかなしきものに思ひきこゆるを(惜しく残念で悲しいものに思え申しますので)、君だに世の常にもてなしたまひて(あなただけでも世間並みに結婚なさって頂き)、かかる身のありさまもおもだたしく(よって私の立場も面目が立ち)、慰むばかり見たてまつりなさばや(もって気が休まるように御世話できたらと思います)」

と聞こえたまはば(と申しなさると)、いかに思すにかと(妹君は姉君が何をお考えなのかと)、心憂くて(情けなく)、

「一所をのみやは(父宮は一人だけを)、さて世に果てたまへとは(そのように独身で終えなされよとは)、聞こえたまひけむ(申されたでしょうか)。はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさ

は(出来が悪い私への心配は)、数添ひたるやうにこそ(より多いと)、思されためりしか(父宮はお思いだったのではありませんか)。心細き御慰めには(独身暮らしの心細さの御慰めには)、かく朝夕に見たてまつるより(このように毎日お目にかかる他に)、いかなるかたにか(どんな手立てがありましょう)」

と、*なま恨めしく思ひたまひつれば(と姉君の意に反して不満にお思いなので)、げにと(それもそうだろうと)、いとほしくて(姉君は妹が愛しくて)、　*「なまうらめし」は<少しうらめしい。なんとなくうらめしい。>と古語辞典にある。何処か反面で意に反する、みたいな語感だろうか。しかし、妹姫は自分と中納言との縁談を、何も半ば喜んでいる訳ではない。だから、何処か少し不満、なのではなく、全面的に不満なのだ。だから、この接頭語の「なま」は姉姫の意図に反して、という意味の<逆に>という言い方だ。

「なほ(でも)、これかれ(何かと)、うたてひがひがしきものに言ひ思ふべかめるにつけて(女房たちが私たちを分からず屋の頑固者と言い思っているらしいので)、思ひ乱れはべるぞや(中納言の手引きをしそうだと、落ち着かないのです)」

と、言ひさしたまひつ(とそれ以上は申せ為さいませんでした)。

[第三段　薫は帰らず、大君、苦悩す]

暮れゆくに、客人は帰りたまはず、姫宮、いとむつかしと思す(夜になっても客人の中納言殿はお帰りにならず、姫君はとても面倒にお思いになります)。弁参りて(弁の君が姫の御部屋に参って)、御消息ども聞こえ伝へて(中納言殿の御意向の数々を申し伝えて)、怨みたまふをことわりなるよしを(姫が対面に応じなさらないのを中納言殿が不満に御思いなのを無理もないという物の道理を)、つぶつぶと聞こゆれば(事細かく申し上げると)、いらへもしたまはず、うち嘆きて(姫君はお応えも為さらず嘆息して)、

「いかにもてなすべき身にかは(私は中納言殿にどう応対すべき立場なのだろう)。*一所おはせましかば(父宮さえ生きていらっしゃったなら)、ともかくも(どういう縁談にしても)、*さるべき人に扱はれたてまつりて(王族らしい婚礼を挙げて頂いて)、宿世といふなる方につけて(運命に身を任せた結婚生活をしていれば)、身を心ともせぬ世なれば(ままならぬのが世の常なので)、皆例のことにてこそは(何があっても良くある事として)、*人笑へなる咎をも隠すなれ(特には恥にならないだろう)。　*「ひとところ」は<「ところ」は高貴な人を数える助数詞的接尾語。>と古語辞典にあり<おひとり>という言い方らしく、此処では故父宮＝八宮のことらしい。　*「さるべき人に」の「に」は述語が「扱はる」という受身表現なので、主語ではなく目的語の格助詞で、「さるべき人」は姫自身を指し、「さるべし」は<それに相応しい＝王家らしい婚礼>を意味するのだろう。要するに姫は、自分の好き嫌いという判断では無しに、とはいえ、それに無関係にということではなく、自分が主体としてではなく、八宮に総合的な社会的判断をして欲しい、という気持ちのようで、それは社会性に乏しい箱入り娘であれば、むしろ普通で妥当な見識であり、社会経験のある男親に診断を求めるのは現代でも基本的な結婚様式だ。なお、此処での「たてまつる」は、会話発言文(是は内心文のようだが語法は順ずる)に於ける丁寧語語用かと思う。即ち、「扱はる」対象体は話者である姫自身であり、その姫を目的語として働き掛けて「たてまつる」のは八宮なので、この「たてまつる」は八宮の姫への尊敬ではなく、姫の八宮への謙譲でなければ変だ。会話文での話者が相手に使う「給ふ」と同じ丁寧語法なのだろう。　*「人笑へな

る咎」は確かに椎本巻二章四段で八宮が戒めていた。それを姉姫は重く受け止めているのだろうし、山育ちの世慣れぬ経験不足が余計に引け目だったのだろう。とにかく、この「人笑へ」は姫にとっては決定的な価値基準であったらしく、留意したい言葉だ。

*ある限りの人は年積もり(残っている女房たちは皆年を取り)、さかしげにおのがじしは思ひつつ(分かったように勝手に考えて)、心をやりて(思い込んで)、似つかはしげなることを聞こえ知らすれど(中納言殿が私に相応しい縁談相手のように申し聞かせるが)、*こは(このような、私に物欲しげな顔をさせようという中納言殿の考え方が)、はかばかしきことかは(責任ある態度と言えるのか)。人めかしからぬ心どもにて(良く事情も知らないで)、ただ一方に言ふにこそは(ただ一方的に言っている)」　*「ある限りの人」は＜今いる女房たち全員＞という言い方らしいが、「ある限り」の語意からは＜女房＞の意味は取り難く、現に私には分からなかったが、訳文を見ればなるほどそうかと分かる言い方なので、こういう場面では良くこういう言い方をした、と思うべきなのだろう。　*「こは」は＜この中納言殿との縁談は＞という外形的な意味ではなく、姫の実体験から思う屈辱感と読んで置く。

と見たまへば(とお思いになって)、引き動かしつばかり聞こえあへるも(女房たちが姫君を中納言との面談に差向けようとばかり申し立て合うのも)、いと心憂く疎ましくて(全く心外で疎ましく)、動ぜられたまはず(出座為さいません)。

同じ心に何ごとも語らひきこえたまふ中の宮は(姉姫と同じ独身で通す心算で何ごとも相談し合っていらっしゃる妹君は)、かかる筋には(こういう縁談話には)、今すこし心も得ずおほどかにて(姉以上に理解が薄く反応が無く)、何とも聞き入れたまはねば(相談しようにも、何もお分かりでないので)、「*あやしくもありける身かな(不思議なくらい孤独だ)」と、ただ奥ざまに向きておはすれば(と姫君はただ後ろを向いて座っていらっしゃったので)、　*「あやしくもありける身かな」は注に＜大君の思い。『集成』は「一人ぼっちの変な身の上の私だこと」と注す。＞とある。状況から見て＜孤独感＞なのかとは思うが、「あやし」という曖昧表現は分かり難い。それに何より、是が姉君の内心文だという事自体が非常に分かり難い。

「例の色の御衣どもたてまつり替へよ(姫君を喪服から平服に着替え差し上げ申せ)」

など、そそのかしきこえつつ(などと女房たちが催促申しながら)、皆、さる心すべかめるけしきを、あさましく(皆が姫を中納言と結婚させようとしているらしい様子なのが情けなく)、

「*げに、何の障り所かはあらむ(もう隠れ場所も無さそうだが、尤も、女房たちの目には中納言殿は申し分の無い結婚相手なのだろう)。ほどもなくて(何しろこのままではジリ貧で)、かかる御住まひのかひなき(このような父宮がお遺しになった屋敷暮らしも虚しい)、*山梨の花ぞ(ヤマナシのように実が無い花なのだから)」、逃れむ方なかりける(もう逃げようはないのです)。*「げに何の障り所かはあらむ」は二重文意の洒落語用だ。この期に及んで気の利いた言い回しをしている場合でも無いだろうに、逆に此処で腹を固めたことを示す、度胸が据わった言い方なのかも知れない。上文を受ける一意は＜確かに是では何処にも隠れ場所が無い＞であり、下文に掛かる洒落語用では＜確かに女房たちの傍目には、中納言殿との縁談に何の支障も無いように見えるだろう＞で、全て明示して言い換える。　*「やまなし」は＜イヌナシの異

名。実は小さく、食用にならない。＞と古語辞典にある。注には＜『源氏釈』は「世の中をうしと言ひてもいづこにか身をば隠さむ山梨の花」（古今六帖六、山梨）を指摘。＞とある。

客人は(マラウトの中納言は)、かく*顕証に(このように表立って)、これかれにも口入れさせず(誰彼に口出しさせること無く)、「忍びやかに(目立たずに)、いつありけむこととともなくもてなしてこそ(いつ始まった恋ということもなく、自然にそうなる運命だったというような馴れ初めが望ましい)」と*思ひそめたまひけることなれば(というのが理想的な姫との関係と思い描きなさっていたことなので)、　*「顕証(けせう、けしょう)」は＜あらわではっきりしていること＞と古語辞典にある。この堅苦しい言葉をわざわざ使う意図は何か。分からない。作者が覚えたての言葉で使いたかっただけかも知れない。　*「思ひ初む(おもひそむ)」は＜恋し始める＞でもあるが、一般語用で＜考え始める→構想を思い付く＞でもあるらしく、薫君は姫との仲を実の兄弟のような親しさから抜き差しならない関係になるのを理想視しているような記事が一章七段にあった。薫君は自分が決定者という責任を負う形ではなく、また、誰がどうというはっきりした経緯に裏付けられるものではなく、こうなる定めだったという形に収めたかったようだ。が、姫はどうしても中納言に責任を負って欲しかったのであり、此処に二人の仲は破綻している。

「御心許したまはずは(姫がその気をお見せにならない内は)、いつもいつも、かくて過ぐさむ(いつまでも兄弟の睦まじさでお話し申そう)」

と思しのたまふを(と思い仰るのを)、この老い人の(この老女の弁の気味が)、*おのがじし語らひて(勝手な解釈で他の女房に言い触らし)、顕証に*ささめき(後は姫が早く身を任せなされば良いとまでも、はっきり吹聴し)、さは言へど、*深からぬけに(そうは言っても悪気は無さそうで)、老いひがめるにや(老いの一徹から来る焦りからだろうか)、*いとほしくぞ見ゆる(弁が姫の幸せを願う忠誠心は慈愛にも思えます)。　*「おのがじし」は＜おのおのがめいめいに＞と古語辞典にあるが、主語は「このおいびと＝弁の君」一人なので、この「おのがじし」は＜各自が思い思いに→自分勝手な解釈で＞という意味であり、弁の君の勝手な解釈とは＜中納言はいつまでも待つといっているのだから、後は姫が意地を張らずに早く中納言に身を任せれば良い＞ということなのだろう。また、「語らふ」は＜相談する＞でもあるが、此処では＜話し聞かせる→説得する→言い包める＞のだろう。　*「ささめく」は＜小声でひそひそと話す。ささやく。＞でもあるが、ひそやかにさも事実めかして話して＜噂を立てる→吹聴する＞でもありそうだ。　*「深からぬけに」は＜深謀は無い風で→悪気は無い様子で＞だろうか。　*「いとほし」の対象体は「おのがじし」だろうか。

［第四段　大君、弁と相談する］

姫宮、思しわづらひて(姫君は有りがた迷惑にお思いになって)、弁が参れるにのたまふ(弁が来た時におっしゃいます)。

「年ごろも(何年にもなる中納言殿の当家へのご訪問を)、*人に似ぬ御心寄せとのみのたまひわたりしを聞きおき(普通ではない感心な仏道への御篤信とばかり父宮が仰せになっていらしたのを聞いていて)、今となりては(父宮亡き今となっては)、よろづに残りなく頼みきこえて(生活全般に御援助頂いて)、あやしきまでうちとけにたるを(不思議なほど親しくなっていますが)、思ひしに違ふさまなる御心ばへの混じりて(私が思っていた中納言殿の父宮への御好意とは違う中納言殿の御意向が混じって)、恨みたまふめるこそわりなけれ(私に不満をお持ちのようなのが

分かりません)。　*「人に似ぬ御心寄せ」は注に＜薫の人物評。＞とあるが、何を指しているのか分からない。が、「のたまひわたりし」が注に＜主語は故八宮。＞とあり、であれば、八宮から見た薫君の人物評なら、「みこころよせ」は＜隠遁生活への憧憬←仏道への篤信＞なのだろう。

世に人めきてあらまほしき身ならば(夫婦縁を人並みに結ぼうという身であったなら)、かかる御ことをも(このような中納言殿との御縁を)、何かはもて離れても思はまし(どうして避けようなどと思いましょうか)。されど(しかし私は)、昔より*思ひ離れそめたる心にて(昔から出家に染みた心なので)、いと苦しきを(こういう話はとても辛いのです)。　*「おもひはなる」は＜出家する、出家心を持つ＞ということらしい。姫に出家心が昔からあったかどうかは不明だが、結婚を断る口実に出家を口にしたのは以前にもあったかと思う。

この君の盛り過ぎたまはむも口惜し(それに、妹が婚期を逃しそうなのも気懸かりです)。*げに、かかる住まひも(本当に中納言殿がお思いにように、このような落ち着いた山暮らしも)、ただこの*御ゆかりに所狭くのみおぼゆるを(しかし王家の血を継ぐべき妹の立場には不都合にばかり思えますので)、*まことに昔を思ひきこえたまふ心ざしならば(あなたがが真に故宮の御遺志を大事に思って下さるのなら)、同じことに思ひなしたまへかし(中納言殿のお相手は私ではなく、妹でも同じことだと御思い頂たいのです)。　*「げにかかる」は形容の強調副詞語用だろうが、その形容自体の文意が分からない。対象体目的語は「住まひ＝山暮らし」なので、考えられる形容は＜わびしい、貧しい、寂しい＞とかいう低評価と、逆に＜穏やかな、簡素な、興趣ある＞とかいう高評価など非常に多様なので、とても舌足らずの分かり難い文だ。下文からの逆推で、此処の「げに」は＜中納言殿が高評価なさっていた通り＞で、「かかる」は(このように穏やかな、落ち着いた)という文意が分かり易そうに見えるが、断定はし難い。だから曖昧なままにして置こうかとも思うが、そうすると文意が分からない気持ち悪い言い換えになってしまうので、読み違えかも知れないが、左様に明示補語して置く。　*「おおんゆかり」は＜御縁者＞で「御」は父宮に対する尊称だろうから、父宮の御子ということでは姉姫自身も含まれるが、前に「この」と指示されているので、この「この御ゆかり」は＜王家を継ぐべきこの妹＞という言い方なのだろう。つまり、姉は父宮の遺志を継ぐ立場であり、妹は王家の血を継ぐ立場である、というのが姉姫の考え方、ということらしい。あまり客観的な説得力は無い論理かと思うが、姫がそう思い込んでいる事は確からしい。そういう考え方が一番心が落ち着く、という姫の立場は分かるような気もする。*「まことに昔を思ひきこえたまふ心ざしならば」は注に＜「昔」は故人八宮。「たまふ」は弁に対する敬語。＞とある。私は中納言に対しての伝言かと思ったが、下の結びで姫は「なほ」と、上文を改めて中納言に伝言するように、弁に言い付けているので、此処はやはり姫が弁に直接説得を試みていると読むべきらしい。確かに、姫は弁の暴走を制したく、弁に話している、という文脈ではありそうだが。

*身を分けたる心のうちは皆ゆづりて(姉妹に身を分けた妹の方に、そうした情緒方面のことは全て任せて)、見たてまつらむ心地なむすべき(私はその御世話をしたく思っています)。　*「身を分けたる心のうち」は＜体を姉妹の二つに分けた同じ思いの内側＞で、「皆ゆづりて」は＜それを全て妹に託して＞ということだろうか。だとすると、思いの外側＝外見・体裁は自分が引き受ける、みたいな言い方なのだろうか。だとすると、思いの内側＝本心で、その本心は女心だとすると、姫は図らずも中納言への恋心を吐露してしまったことになる、のではないのか。上文の論理は、「御ゆかり」＝自分たち姉妹＝「同じこと」、という言い方であり、それを前提に「身を分けたる心のうち」という言い方で、姉妹の役割として＜女心を持つ生き方→情緒を受け持つ方＞は妹だ、と理由立てて、よりいっそうに妹を推挙する説得を試みているのかも知れないが、それらは全て姉姫の思い込みで客観的な説得力は無い。せいぜい、そう思いたい姫の心情が分かる、ということでしかない。こういう理

屈を聞かされる弁がどういう判断をするのか、全く見当が付かない。ただし弁は、姉と中納言、妹と兵部卿宮、という薫君が言っていた通りの取り合わせが一番良いとは思っているようで、後は姫の心情と全体の合理性、特に自分たちの生活が立つかどうか、に感心があるのは間違いない。

なほ(中納言殿には重ねて)、かうやうによろしげに聞こえなされよ(このようによろしく申し伝えてください)」

と、恥ぢらひたるものから(と姫君は心情を語るに恥らいながらも)、あるべきさまをのたまひ続くれば(自分の望む事柄を仰り続けるので)、いとあはれと見たてまつる(弁はとても御同情申し上げます)。

「さのみこそは、さきざきも御けしきを見たまふれば(左様には以前からもあなた様の御意向を存じ上げておりますので)、いとよく聞こえさすれど(私も中納言殿に何度も申し上げておりますが)、さはえ思ひ改むまじ(中納言殿はそのようには考え直せない)、兵部卿宮の御恨み、深さまさるめれば(妹君を御自分が娶りなさったのでは、兵部卿宮の御不満が深まるばかりなので)、またそなたざまに(妹君と兵部卿宮との縁談は、また別にそれはそれとして)、いとよく後見きこえむ(上首尾をお図り申したい)、となむ聞こえたまふ(とのように仰せなのです)。

それも思ふやうなる御ことどもなり(それも結構なお話なのです)。二所ながらおはしまして(御両親共にご健在で)、ことさらに、いみじき御心尽くしてかしづききこえさせたまはむに(特別に非常に大事に御育て申しなさいましても)、えしも、かく世にありがたき御ことども(とてもこのようには恵まれた縁談が)、さし集ひたまはざらまし(寄り集まるものではございません)。

かしこけれど(畏れながら)、かくいとたつきなげなる御ありさまを見たてまつるに(このようにとても頼りないお暮らしぶりを拝しますに)、いかになり果てさせたまはむと(このままでは将来がどうお成りかと)、うしろめたく悲しくのみ見たてまつるを(心配で悲しく思われますのを)、後の御心は知りがたけれど(後々までの殿方の御誠意までは分かりませんが)、うつくしくめでたき御宿世どもにこそおはしましけれとなむ(今現にこうして御縁談に恵まれなさって、姫君お二人ともに立派で喜ばしい御運勢でいらっしゃることと)、かつがつ思ひきこゆる(何はともあれお祝い申し上げます)。

故宮の御遺言違へじと思し召すかたはことわりなれど(故宮の御遺言に背くまいとお考えなのは当然ですが)、それは、さるべき人のおはせず(それは相応しい相手がいらっしゃらず)、品ほどならぬことやおはしまさむと思して(身分違いの縁談もあろうかと故宮がお考えになって)、戒めきこえさせたまふめりしにこそ(戒め申しなさったものです)。

この殿の(源の中納言殿が)、さやうなる心ばへものしたまはましかば(そうした婚意をお持ちでいらっしゃるなら)、一所をうしろやすく見おきたてまつりて(どちらかの姫お一人を娶わせなさって安泰な身分に見届け申し上げれば)、いかにうれしからましと(どんなに嬉しいことだろうと)、折々のたまはせしものを(折に付け仰っていらしたのですから)。

ほどほどにつけて(どんな身分の者でも)、思ふ人に後れたまひぬる人は(頼りに思う人に先立たれなさった人は)、高きも下れるも(高貴な者も下卑た者も)、*心の外に(結婚時には予期しなかったような)、あるまじきさまにさすらふたぐひだにこそ多くはべるめれ(惨めな境遇に彷徨う例が多いのです)。　*「こころのほかに〜」は地方に下向した弁の実感なのかも知れない。であれば、実際の語調は説得力のある抑揚だったのだろう。

それ皆例のことなめれば、もどき言ふ人もはべらず(そんなことは普通のことなので、特に言い立てる人はいませんが、世の中はそんなものです)。まして、かくばかり(ましてこれほどに)、ことさらにも作り出でまほしげなる人の御ありさまに(まるで作り物のように理想的な中納言殿のお姿ご身分で)、心ざし深くありがたげに聞こえたまふを(好意を深く有難く申し下さるのを)、あながちにもて離れさせたまうて(むやみにお断りなさって)、思しおきつるやうに(あなた様のお考えのように)、*行ひの本意を遂げたまふとも(入信出家なさろうとも)、*さりとて雲霞をやは(信仰心があるからといって仙人じゃあるまいし、雲や霞をで生きて行けましょうや)」　*「さりとて雲霞をやは」は、与謝野訳文に＜仙人のように雲や霞を召し上がって生きて行くことはできるでございましょうか＞とあり、渋谷訳文に＜そうかといって雲や霞を食べて生きらえましょうか＞とある。そう言われれば、それ以外の文意は無さそうだ。が、「をやは」の並びが妙に紛らわしい。此処では「をや・は」という感嘆意ではなく、「を・やは」という反語意であり、格助詞「を」の下に＜はむ(食む)＞などが省かれている、ということらしい。　*「おこなひのほい」は姫が言った「昔より思ひ離れそめたる心にて」に対する反論、と注にある。

など、*すべてこと多く申し続くれば(などと弁の君は全てに言葉多く尤もらしく言い立てるので)、いと憎く心づきなしと思して(姫はとても不快で不満で)、ひれ臥したまへり(気力が萎えてしまいなさいました)。　*「すべてこと多く申し続くれば」は御蔭で私にも分かり易い文が続いて、久しぶりに快調に読み進めた。本当に久しぶりだ。

[第五段　大君、中の君を残して逃れる]

中の宮も(妹君も)、あいなくいとほしき御けしきかなと(姉君が不本意で嘆かわしい御様子のようだと)、見たてまつりたまひて(拝し申し上げなさって)、もろともに例のやうに大殿籠もりぬ(姉君と一緒にいつもの帳台で御寝みになりました)。

うしろめたく(不安で)、いかにもてなさむ(どうしたものか)、とおぼえたまへど(と姉君はお思いになったが)、ことさらめきて(特に何処と)、さし籠もり隠ろへたまふべきものの隈だになき御住まひなれば(隠れ込みなされる物陰さえ無い御家なので)、なよよかにをかしき御衣(柔らかで美しい夜着を)、上にひき着せたてまつりたまひて(上から被りなさって)、*まだけはひ暑きほどなれば(まだ八月下旬で陽気が暑い頃なので)、すこしまろび退きて臥したまへり(少し寝返りして横になっていらっしゃいました)。　*「まだけはひ暑きほどなれば」は注に＜八月下旬であるが残暑が残っている。＞とある。確かに、二章一段に「つつみきこえたまひし藤の衣も改めたまへらむ長月も静心なくて、またおはしたり」とあったので、八月二十日頃の一周忌から日を置かずに薫君は訪れたらしい。

弁は、のたまひつるさまを客人に聞こゆ(弁は姫が仰ったことを客間の中納言殿に伝え申し上げます)。

「いかなれば、いとかくしも世を思ひ離れたまふらむ(どうしてそれほどに出家をお考えなさるのか)。聖だちたまへりしあたりにて(聖人のようでいらっしゃった故宮と一緒に暮らして)、常なきものに思ひ知りたまへるにや(世を無常だとお悟りなさったのだろうか)」と思すに(とお思いになると)、いとどわが心通ひておぼゆれば(中納言殿はますます姫の心情が自分と似通っている気がして)、さかしだち憎くもおぼえず(利口ぶった小賢しい女とも思えません)。

「さらば、物越などにも(それでは物越しでの面談さえ)、今はあるまじきことに思しなるにこそはあなれ(もう直談は以ての外とお思いのようですね)。*今宵ばかり(今宵は私に任せて)、大殿籠もるらむあたりにも(姫の寝所にも)、忍びてたばかれ(隠れて手引きせよ)」　*「こよひばかり」の「ばかり」は範囲を特定する副助詞のようだが、特定するという意図は結果として、その範囲に及ぶ効果を強く意識するという強調意を持つ。で、その効果の中身がどういうことかが問題となる。さて薫君は、姫が自分を避ける理由がずっと分からなかったのだが、それは仮に方便だとしても姫の言葉として、姫が出家を望んでいるからだった、と知った。であれば、このまま何時まで待っていても、姫の方から薫君との婚意を示すことは全く期待出来ない事が、薫君には分かった。かと言って、薫君には、自分が姫と結婚して、兵部卿宮が妹と結婚する形が、八宮の御遺言に適う最良の方法だという判断に、社会人としての絶対的な自信があり、姫もその道理は承知しているかに弁から聞き知っている。基本的に自分は正しい。弁を初め主だった女房たちも自分に同調している。また、姫の仏道心も分かるだけに、むしろ自分なら姫を説得できるような自負もある。いや、しかし実は、姫の拒否は山暮らしの女心からなのであり、出家は方便に過ぎないので、その女心が分からない薫君には姫は絶対に説得できない。ただ、それでもまだ、今夜にでも強引に抱いてしまえば違う展開もあるのだろうが、薫君は未だに説得できると思っているので、見込みは薄い。いや、だから、この「ばかり」は薫君が意を決して姫を襲う心算で言う＜こそは、だけは＞ではなく、姫が自分を避ける理由が出家心なら説得できるので、そういうことなら＜今夜のところは私に任せて＞という余裕を扱いた言い方、なのだろう。ただ、確かに後は中納言に任せる他はないのだが、傍目にには普通、それを説得ではなく情事と思うのではないだろうか。だとすると、帳台に妹君がいることは何とも不都合だが、それも含めて中納言に任せる他はない、ということか。

とのたまへば(と中納言殿が仰るので)、心して(その心算で弁などは)、人疾く静めなど(他の女房たちを早く寝静めさせたりして)、*心知れるどちは思ひ構ふ(事情を承知している古女房たちで中納言を手引きする手筈を整えます)。　*「心知れるどち」は弁と親しい女房たち、らしい。

宵すこし過ぐるほどに(日暮れて少し経った頃に)、風の音荒らかにうち吹くに(風の音が吹き荒れて)、はかなきさまなる蔀などは(簡素な作りの蔀戸などは)、ひしひしと紛るる音に(ひしひしときしんで誤魔化しが利くので)、「人の忍びたまへる振る舞ひは、え聞きつけたまはじ(中納言殿が忍び込みなさる音も姫はお分かりにならないだろう)」と思ひて、やをら導き入る(と思って弁は中納言殿を静かに御部屋に手引きします)。

同じ所に大殿籠もれるを(妹君が同じ帳台に寝ていらっしゃるのを)、うしろめたしと思へど(気懸かりに思ったが)、「常のことなれば、ほかほかにともいかが聞こえむ(いつもそうしているので、今日だけ別々にとも申し上げる理由が無い)。御けはひをも(姫のお姿は)、たどたどしからず見たてまつり知りたまへらむ(中納言殿はよく見知り申しなさっているので、間違えなさらない筈だ)」と思ひけるに(と弁は思っていたが)、うちもまどろみたまはねば(姫は用心して少しも寝入っていらっしゃらず)、ふと聞きつけ*たまて(この物音をふと聞きつけなさって)、やを

ら起き出でたまひぬ(静かに起き出しなさいました)。いと疾くはひ隠れたまひぬ(そして素早く帳台を這い出て隠れなさいました)。　*「たまて」は＜たまひて＞の音便らしい。

何心もなく寝入りたまへるを(無心に寝入っていらっしゃる妹君を)、いといとほしく(とても気懸かりで)、いかにするわざぞと(どうしたものかと)、胸つぶれて(動転して)、もろともに*隠れなばやと思へど(一緒に隠れなければと思ったが)、さもえ立ち返らで(今さらそのようにやり直すことも出来ずに)、わななくわななく見たまへば(姫は震えながら様子を御覧になると)、*「隠れなばや」は、「隠る」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の未然形・否定形＋条件項を示す論理助詞「ば」＋疑問・反意の係助詞「や」という構成文で、理屈としては＜隠れて＞＜いない＞＜ならば＞＜問題だ＞で、全体で＜隠れなければ、ならない＞という言い方。

火のほのかなるに(部屋灯りが仄かに灯る中に)、袿姿にて(中納言が内着姿で)、いと馴れ顔に(とても親しげな柔和な表情で)、几帳の帷を引き上げて入りぬるを(帳台の垂れ幕を引き上げて中に入るのを)、いみじくいとほしく(切実に案じられて)、「いかにおぼえたまはむ(妹はどうお思いになるだろう)」と思ひながら(と姉姫は思いながら)、*あやしき壁の面に(もう晩秋になろうかという時期で夏でもないのに、風変わりな蟋蟀よろしく壁の隙間に)、屏風を立てたるうしろの(屏風を立てた後ろの)、むつかしげなるにゐたまひぬ(狭苦しい所に座していらっしゃいました)。　*「あやし」は＜変だ、不審だ＞だが、これは「壁」の物性に掛かる形容ではなく、姫のその場での状態を示しているのだろうが、それにしても「あやし」い語用だ。で、どうやら是は、下の七段に「壁の中のきりぎりす這ひ出でたまへる」と姫を「壁の中のきりぎりす」に例えていて、その言い回しが漢籍の「季夏蟋蟀壁ニ居ル」(礼記、月令)に基づいているという指摘が当該項目に記されていることからして、無学な私にとっては先読みからのネタバレなのだが、当時の知識人にとってはこの漢籍を踏まえて語意を得るのは先読みではなく常識だったらしく、その語意が、この「あやし」の本来の語用の意味のようなので、後付けながら左様補語して置く。

「*あらましごとにてだに(例え話でさえ、私が独身でいる代わりに妹が結婚するということを)、つらしと思ひたまへりつるを(妹は不本意に思いなさっていたのに)、まいて(まして現に中納言殿を差向けたとあっては)、いかにめづらかに思し疎まむ(どんなに驚き嫌がりなさることだろうか)」と、いと心苦しきにも(と姉姫は妹君に本当に相済まなかったが)、　*「あらましごと」は二段で姫が妹に言った「君だに世の常にもてなしたまひて、かかる身のありさまもおもだたしく、慰むばかり見たてまつりなさばや」あたりのことであり、それに対して妹君は姉妹で一緒に居てこそ心細い独身生活も慰められる、と反論していた。

すべてはかばかしき後見なくて(結局は有力な血縁の支援者がいなくて)、落ちとまる身どもの悲しきを思ひ続けたまふに(落ちぶれている王家姉妹の身の上の悲しさとお考えなされば)、今はとて山に登りたまひし夕べの御さまなど(頼みにしていた父宮が最期に山に登って行きなさった夕べの御姿が)、ただ今の心地して(つい今しがたのような気がして)、*いみじく恋しく悲しくおぼえたまふ(この事態の急変に、無性に昔が恋しく悲しく思えなさいます)。　*「いみじく恋しく悲しくおぼえたまふ」は＜昔を懐かしむ＞のだろうが、弁も言っていたように、仮に二親が揃っていようと、今を時向く中納言や兵部卿宮との縁談など、なかなか纏まるものではないだろう。ただ、親掛かりで栄えある形で嫁入りなり婿取りなりするのとはとがって、今の立場では姫君たちは確かに拾われた格好にはなってしまうだろう。しかし、現実の事情として、これ以上望むべくも無い相手であることは間違いなく、やはり客観的には姫のほうが世間知ら

ずと見做されるのだろう。しかし、それを慮って庇ってこその主人だろうに、薫君は自分の劣等感を払拭できずに良い人を演じすぎた。尤も、薫君に劣等感がなかったら、宇治姫に関心を寄せる事自体も無かったか。

［第六段　薫、相手を中の君と知る］

中納言は、*独り臥したまへるを（中納言は姫が妹を余所へ寝かせて、此処には独りで横になっていらっしゃるのを）、*心しけるにやとうれしくて、心ときめきしたまふに（姫も男が忍び入るのを弁から聞かされて、その上でその気になって待っているのかと嬉しくて、心を躍らせなさるが）、やうやうあらざりけりと見る（次第に是は姉姫ではないと気付きます）。「今すこしうつくしくらうたげなるけしきはまさりてや（この姫は姉姫よりも、可憐で幼い感じだ）」とおぼゆ（と思えます）。　*「独り臥したまへる」の主語は妹君。だろうが、私には妙に分かり難い。また此処だけではなく、この文は文意が文脈から想像し易いので、その意味では主語も見当を付け易いが、文自体を読む分には、主語は非常に分かり難く、前後の文脈無しに、この文だけを取り出したら相当に文意が混乱しそうだ。　*「心す」は＜気を付ける＞と古語辞典にあるが、此処では＜その気になる＞だろう。注には＜薫の心中。『集成』は「薫を迎える積りで、大君を一人にさせたのかと思う」。『完訳』は「大君が自分を迎えてくれたと欣喜」と注す。＞とある。弁に諭された、と薫君は思ったのだろう。

あさましげにあきれ惑ひたまへるを（この姫が驚き呆れて戸惑っていらっしゃるのを）、「げに、心も知らざりける（なるほど事情を知らないようだ）」と見ゆれば（と分かると）、いといとほしくもあり（中納言はとても可哀相で）、またおし返して（またそれだけに逆に）、隠れたまへらむつらさの（隠れなさった姉姫の連れなさが）、まめやかに心憂くねたければ（実に不満で憎らしいので）、これをもよそのものとはえ思ひ放つまじけれど（この人も他人に譲らず、自分のものにしてしまおうかと気も荒ぶるが）、なほ本意の違はむ（さすがにそれでは計画が違ってしまうのが）、口惜しくて（残念なので）、

「うちつけに浅かりけりともおぼえたてまつらじ（姉姫には私の好意を、場当たりの思い付きとは思われ申すまい）。この一ふしは、なほ過ぐして（この場はやはり遣り過ごして）、つひに、宿世逃れずは、こなたざまにならむも（それでも、そうなる運命ならば、この人と結ばれるのも、良いだろう）。何かは異人のやうにやは（どうしてこの人を別人のように扱い申そうか、姉姫と同じように接しよう）」

と思ひ覚まして（と冷静に考えて）、例の（姉姫にするのと同じように）、をかしくなつかしきさまに語らひて明かしたまひつ（情趣ある優しい態度で妹姫に語らって夜を明かしなさいました）。

老い人どもは（老女たちは、この物静かな寝所の気配に）、*しそしつと思ひて（一先ず大丈夫と思って）、　*「しそしつ」は、「為（す、動作する）」の連用形＋「そす（過ぎる、終わる、収まる）」の連用形＋完了状態を示す助動詞「つ」の終止形、という構成で＜し終わっている＝一段落している＞という状況判断らしい。この時の女房たちの心配事は何だったのか。五段に「同じ所に大殿籠もれるを、うしろめたしと思へど」という弁の気懸かりが語られていた。姉妹が寝ている寝台に男が入ってきたら、普通なら大騒ぎになるはずだ。その時に上手く事を鎮めようと、古女房たちは寝台の前に待機していたのだろう。しかし、中納言が寝台に入って行っても、騒ぎは起こらずに、静かに語らっている様子だ。子細は分からないが、静かに事が運ぶなら、中納言に任せておけば良いの

で、自分たちに出番は無いと安心した、ということなのだろう。左様に解釈して、この「しそしつ」を＜一先ず大丈夫＞と言い換えて置くが、ここまで読者に下駄を預けるとは、曖昧表現にもほどがある。

「中の宮（それにしても妹君は）、いづこにかおはしますらむ（どこにいらっしゃるのでしょう）。あやしきわざかな（此方へ出ていらっしゃらないとは、変ですねえ）」

と、たどりあへり（と不思議がって）。

「さりとも（ともかく）、*あるやうあらむ（収まっているようです）」　*「あるやうあらむ」は普通なら＜何かわけがあるのだろう＞みたいな言い方、かと思う。が、この場合は「あやしきわざかな」と不審に思いながらも、現に事態が穏やかななので＜何とかなっているのだろう＞と、女房たちは楽観視しようとしている、ということなのだろう。まさか、姉にせよ妹にせよ、姫君が寝台の奥から滑り出て壁際に潜むとは、女房たちには思いも寄らないことに違いない。妹君は寝入っているか、姉姫に宥められているか、とにかく、騒ぎ立てることは無さそうで、もし起きているのなら、そのうち妹自身が静かに寝台を出て、此方に用意した布団でお休みになる筈だ、と思ったのだろう。よく分からないが、そう読んで置く。

など言ふ（などと言います）。

「おほかた例の（そもそもあれほどに）、見たてまつるに皺のぶる心地して（お見受け申すに皺も伸びる気がして）、めでたくあはれに見まほしき御容貌ありさまを（嬉しく感心して見ていたい御顔形を）、などて（どうして姫君は）、いともて離れては聞こえたまふらむ（そんなに遠ざけ申しなさるのでしょう）。何か、*これは世の人の言ふめる、恐ろしき神ぞ、憑きたてまつりたらむ（何か是は、世間の人が行き後れの女に取り付くなどと言うような、恐ろしい神が祟り申しているのでしょうか）」　*「これは世の人の言ふめる恐ろしき神」は注に＜大君に取り憑く。『細流抄』に「世俗の諺に嫁すべき時過ぎぬれば神のつくと也」とある。『河海抄』は「玉葛実ならぬ樹にはちはやぶる神そつくとふならぬ樹ごとに」（万葉集巻二、一〇一）を指摘。＞とある。

と、歯はうちすきて（と歯は抜けて）、愛敬なげに言ひなす女あり（生活苦を恨むように言い立てる者も居て）。また、

「あな、まがまがし（まぁ縁起でもない）。なぞのものか憑かせたまはむ（何でそのような物にとり憑かれていらっしゃいますものか）。ただ、人に遠くて、生ひ出でさせたまふめれば（ただ世間離れしてお育ちになったので）、かかることにも（こうした男女付き合いも）、*つきづきしげにもてなしきこえたまふ人もなくおはしますに（御成長に応じて御相手申しなさる其相応の貴公子たちもいらっしゃらないので）、*はしたなく思さるるにこそ（恋愛経験がないので、無作法になるのを恐れていらっしゃるのです）。今おのづから見たてまつり馴れたまひなば（そのうち自然に見慣れ申しなされば）、思ひきこえたまひてむ（親しくお思い申しなさるでしょう）」　*「つきづきし」は＜いかにも似つかわしい＞と古語辞典にある。別の言い方をすれば、その場ごとに適している、だろうか。「生ひ出でさせたまふめれば」に対応した意味なら＜その成長の都度に相応しい＞と読めそうだ。「もてなしきこえたまふ人」は敬語遣いから貴人ではありそうだが、「人も」の「も」が類推を示す係助詞なので＜そういう類の人たち＞を念頭に置いた言い方に聞こえる。都暮らしなら知り合えたかも知れない貴公子たち、と読んで置く。　*「はしたなし」は＜無作法（になるの）を畏れ恥じる気持ち＞。作法は社会性を示す態度なので、それが身に付いていないのは、そ

の人の品性が疑われ、品位ある応対が期待できなくなる。人とどういう応対をするのかは、実生活そのものであり、生活感の貧富そのものだ。したがって、無作法を恥じるのは社会に対する恭順の姿勢だが、敢えて無作法を演じれば、社会基盤の前提となる構成員の合意や共通認識および基本的な価値観を否定することとなる。作法は生活様式の細々とした規定であり、明文化されていないものが多く、また合意であってみれば、必ずしも固定化されてもいないので、実に微妙な領域だが、個別生活上は支配的に作用する。

など語らひて(などと話し合って)、

「とくうちとけて、思ふやうにておはしまさなむ(早く打ち解けて、結婚なされば良いのに)」

と言ふ言ふ寝入りて(と言いながら寝入って)、いびきなど、かたはらいたくするもあり(いびきなど見苦しくする者もいます)。

*逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど(長く感じそうな目当ての人とは違う相手との秋の夜ながら)、ほどもなく明けぬる心地して(意外に早く朝が明けた気分で)、いづれと分くべくもあらずなまめかしき御けはひを(姉姫に何れ劣らぬ優美な妹君の風情を)、人やりならず飽かぬ心地して(中納言は思わず惜しい気がして)、　*「逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど」の言い回しについては、注に＜『源氏釈』は「長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」（古今集恋三、六三六、凡河内躬恒）を指摘。＞とある。「思ひ果つ」は＜あきらめる＞と古語辞典にある。「長しとも思ひぞはてぬ」は＜長く待たされたからといって逢えないとは諦めない＞といっているのだろう。と同時に此処では、「果つ」が＜終わる→夜が終わる→夜が明ける＞との掛言葉に洒落語用されていて、下句に「秋の夜なれば」と詠まれることで、秋の夜長と言うが＜長いとも思わずに明けてしまった＞を文意するという、非常に凝った言葉遊びとなっている。また、「逢ふ人から」の「から」は原因を示す格助詞で＜逢う相手次第で変わる＞という言い方らしいが、「昔より」の「より」が起源を示す格助詞なので、原因と起源という重複部分の多い概念の語をわざわざ重複させる面白さを意図していて、結句が「なれば」という事情説明の接続詞となっていることで、最後に原因が説明されて発句に前置倒置するという仕掛けは表意が裏意に、裏意が表裏に逆転するという全くの大喜利物だ。即ち、秋の夜長と言うが長いと思う間も無く明けてしまった、昔から逢う人次第で長くも短くもなる秋の夜というから、あの日から長く会えないが諦められないほど今でも恋しくあなたを思う、という歌筋。何処から読んでも文意が通るし、無限にループする募る恋心みたいな趣きもあるのかも知れない。

「*あひ思せよ(どうか身近に思ってください)。いと心憂くつらき人の御さま(ひどく心外な冷たい姉君の為さり様を)、見習ひたまふなよ(真似なさいますな)」　*「あひ思せよ」の「あひ」は＜相＝互いに＝あなたも私と同じように＞という薫君の気持ちのように訳文は取っているが、これはより一般意の念押し強意の接頭語で＜どうか＞くらいの言い方かと思う。というのも、この場で薫君は妹君を、少なくも直接には口説いていたのではなく、八宮との縁を説き、以て自分たちには兄弟縁があり、その兄弟縁の義侠心から援助しているという自分の誠意を訴えて、せいぜいが、この宇治の秋の風情の共有に務めたくらいのもので、であれば、此処で言う「思ふ」は＜信じる＞で、「思せよ」は＜疎遠に為さるな＝親しくして下さい＞という意味であり、是を＜愛す＞という意味に取るのは、薫君にそういう気持ちがあったにせよ、妹君にそう聞こえてしまっては、却って身構えさせて逆効果になりそうに見えるからだ。

など、*後瀬を*契りて出でたまふ(などと今後は直対面する仲であることを確認し合って帳台を出なさいます)。　*「後瀬(のちせ)」は大辞泉に＜次の瀬。下流の瀬。＞ともあるが、此処では＜後の機会。後の逢瀬。＞の語用らしい。ただ、「逢瀬」とは言っても、薫君と妹姫に情事は無かったのだから、その再会が意味するのも、今のところは直対面ということになりそうだ。が、であれば、「後瀬」という言い方は過度に思わせぶりな語用で、薫君の執着を示しているのかも知れないが、であれば、こうした客観視を装う地文ではなく、内心文として表現すべきに思うが、幾分は情緒表現の趣があるのかも知れない。というのも、注には＜後の逢瀬を約束して。『異本紫明抄』は「若狭なる後瀬の山の後も逢はむわが思ふ人に今日ならずとも」（古今六帖二、国）を指摘。「後瀬山」は若狭の国の歌枕。＞とあり、「のちせのやま」を詠み込む若狭路の風情は私には分からないが、「今日ならずとも」に先の文の「逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど」に通じる洒落心を感じるからだ。　*「契る」は＜約束する＞だが、薫君と妹君は具体的な日時はおろか再会を誓い合う間柄ではない。だから、この「契る」は＜縁がある事を期す＞という語用としか納得できないし、その「縁」も差し当たっては＜情事の縁＝結婚縁＞ではなく、このように親しく＜語り合う縁＝兄弟縁＞ということなのだろうが、そういう語用が「ちぎる」という語に有る、という説明は手許の辞書には見当たらない。しかし、そういう文脈としか理解できないので、私はそういう文意と取る事にするが、その上で、何故此処で「契る」という語を使うのかは考えたい。もし、「縁がある事を期す」が正解だとすると、この「期す」は「縁がある事」が当事者の＜願望＞なのではなく、そういう運命だと＜認識共有＞するように薫君が妹君に因果を含めた、という意味になることを示すのが「契る」という言い方なのではないか。此処まで来るとまるで推理小説だが、論理破綻は無いかと思う。

*我ながらあやしく夢のやうにおぼゆれど(中納言は我ながら、このような寝所に男女二人きりという機会に手も出さずに朝を迎えたことを、変な夢のようなことに思えたが)、なほつれなき人の御けしき(やはり連れない姉姫の御真意を)、今一たび見果てむの心に(もう一度見極めたいという気持ちから)、思ひのどめつつ(妹君への恋情は自制して)、例の、出でて臥したまへり(今回も姫の寝所から出て客間でお休みになりました)。　*「我ながらあやしく」は注に＜『集成』は「逢いながら逢わぬ中の君との出会いのこと」。『完訳』は「実事のない逢瀬の複雑な思い」と注す。＞とある。この文意は現代語文の論理性に近いので、ある意味で分かり易いが、逆にその理屈っぽさが、上文までの描写の情緒的曖昧さとの整合性に於いて、奇妙な違和感を覚える。

[第七段　翌朝、それぞれの思い]

弁参りて(弁が帳台の御前に参り来て)、

「いとあやしく(本当に不思議に)、中の宮は、いづくにかおはしますらむ(妹君は何処にいらっしゃるのでしょう)」

と言ふを(と言うのを)、いと恥づかしく思ひかけぬ御心地に(とても恥ずかしく、どう考えて良いのかも分からない妹君のお気持ちでは)、「いかなりけむことにか(昨日の事は一体どういうことだったのか)」と思ひ臥したまへり(と思って横になっていらっしゃいました)。*昨日のたまひしことを思し出でて(姉姫が昨日仰っていた結婚を勧めたことを思い出しては)、姫宮をつらしと思ひきこえたまふ(はっきり断ったのに強引に中納言殿に引き合わせなさるとは、ひどい人だと思い申しなさいます)。　*「昨日のたまひしこと」は、姉姫は妹君に「君だに世の常にもてなしたまひて、か

かる身のありさまもおもだたしく、慰むばかり見たてまつりなさばや」(二段)と結婚を勧めていたが、妹君は自分も姉姫と共に独身を貫くと答えていた、その応酬を指すのだろう。

明けにける*光につきてぞ(すっかり昇った日の光に照らし出されて)、*壁の中のきりぎりす這ひ出でたまへる(壁の中のキリギリスよろしく隠れたいらっしゃった姉姫は帳台に這い上がっていらっしゃいました)。　*「光につく」の「つく」は＜点く＝点灯する＝照らし出される＞だろう。　*「壁の中のきりぎりす」は注に＜『河海抄』は「季夏蟋蟀壁ニ居ル」（礼記、月令）を指摘。壁の側に隠れていた大君を漢籍の故事にちなんで蟋蟀に譬える。＞とある。この注釈で、五段にあった「あやしき壁の面に、屏風を立てたるうしろの、むつかしげなるにゐたまひぬ」という変な表現の意図が、私にはやっと分かった。それと、この非常に緊迫した一夜にも思える場面の語り口の基調が、かくも軽妙である事にこの物語の、特にこの話が奇妙な一風変わった艶談である事を知るべきに思える。マ、異様な濡れ場を期待した読者に、作者は舌を出した心算かも知れないが。その期待が有ってこそ、この話は面白く読めるはずで、繰り返しだが、章や段立ての校訂に於いて、表題に「実事なし」を明記するのはいかにも興醒めかと思う。

思すらむことのいといとほしければ(お考えになっているだろう事がとても懸念されて)、かたみにものも言はれたまはず(姉妹は互いに何も仰れません)。

「ゆかしげなく、心憂くもあるかな(中納言殿との寝所での同席など、きまり悪く情けないことだ)。今より後も(今後も姉君とは)、心ゆるびすべくもあらぬ世にこそ(油断できない仲なのだろう)」と思ひ乱れたまへり(と妹君は思い悩んでいらっしゃいました)。

弁はあなたに参りて(弁は客間の方へ参って)、あさましかりける御心強さを聞きあらはして(中納言から昨夜の一部始終の事情を聞いて、驚くほどの姉姫の強情さを知り至って)、「いとあまり深く、人憎かりけること(あまりに頑なな人付き合いの無さだ)」と、いとほしく思ひほれゐたり(と残念で呆然としていました)。

「*来し方のつらさは(今までの姫のつれなさによる辛い思いは)、なほ残りある心地して(まだ望みのある気がして)、よろづに思ひ慰めつるを(いろいろと気を取り直して来たが)、今宵なむ(今宵という日は)、まことに恥づかしく、身も投げつべき心地する(まことに気まずく、この身を投げ捨ててしまいたいほど惨めな気分だ)。　*「来し方のつらさは」は注に＜以下「漏らしたまふな」まで、薫の弁への詞。＞とある。此処から薫君の発言が始まるというのはとても分かり難く、このように発言文括弧に校訂されていても、話者が中納言で、聞き手が弁の君だというのは、読み進んで文意を掴んでからでなくては判然としないほどだ。例えば、中納言はかくのたまへり、の一言くらいの説明が何故先立って言えないのか、こういうところで古文の感性に非常な違和感を覚える。

捨てがたく落としおきたてまつりたまへりけむ心苦しさを思ひきこゆる方こそ(姫君たちをお見捨て難く遺し置き申しなさった八宮の御無念を推し量り申し上げればこそ)、また、ひたぶるに、身をもえ思ひ捨つまじけれ(また無闇に投げ遣りなことも出来ません)。

かけかけしき筋は、いづ方にも思ひきこえじ(浮ついた気持ちで姫君の何方をも考えては居りません)。憂きもつらきも(私の真意をお汲み取り頂けない情けなさも無念さも)、かたがたに忘られたまふまじくなむ(姉君にも妹君にもお忘れなきように、願いたいのです)。

宮などの(兵部卿宮が)、恥づかしげなく聞こえたまふめるを(同じ王族という立派な身分で結婚をお申し込みなさっていらっしゃるようなので)、同じくは心高く(同じ結婚するなら王族同士で)、と思ふ方ぞ異にものしたまふらむ(と考え方が私とは違っていらっしゃるようだ)、と心得果てつれば(と姫君のお気持ちが分かりましたので)、いとことわりに恥づかしくて(まことにご尤もで畏れ多く)。

また参りて、人びとに見えたてまつらむこともねたくなむ(今後参上してこの山荘の人たちにお目に掛かることもきまり悪い気がします)。よし(よって)、かくをこがましき身の上(このように姫君に侮られ申した見っともない昨夜の事情は)、また人にだに漏らしたまふな(他の者に漏らしなさらぬように)」

と、怨じおきて(と中納言は弁に不平を言い置いて)、例よりも急ぎ出でたまひぬ(怒りの表示に、いつもよりも急いで帰途に着きなさいました)。「誰が御ためもいとほしく(どなたにとって不首尾ですねえ)」と、ささめきあへり(と古女房たちはささやき合っていました)。

[第八段　薫と大君、和歌を詠み交す]

姫君も(ひめぎみも)、「いかにしつることぞ(どういうことだったのだろう)、もし*おろかなる心ものしたまはば(もし中納言殿が冷淡に応じなさったのなら、妹が傷付いただろう)」と、胸つぶれて心苦しければ(と自責の念に駆られて)、すべて、うちあはぬ人びとのさかしら(全ては理解の足りない女房たちの浅知恵の所為だと)、憎しと思す(怨みなさいます)。　*「おろかなる心」は注に＜薫が中君を疎略に扱う心、の意。＞とある。が、姉姫は経験から言っても、むしろ中納言には強引さを求めているのであり、と言っても粗暴さは論外で、非常に複雑な心境だろうが、言ってみれば運任せの上首尾を願っている無責任さはあるのであり、あまりにも見通しが漠然としていて、この「おろか」がどういう内容を指すのかは分かり難い。で、どういう場合でも辛いのは＜冷淡さ＞かと当て込む。

*さまざま思ひたまふに(いろいろな場合を考えていらっしゃる所に)、御文あり(中納言殿からの後朝の御手紙がありました)。例よりはうれしとおぼえたまふも(事の次第が分からないだけに、その一端が知れそうな片方の当事者からの御手紙を、姫君がいつもよりは心待ちに思えなさるのも)、かつはあやし(皮肉です)。　*「さまざま」には情事の有無も当然含まれる。荒々しい様子が無かった事だけは、姉姫も窺い知っているのだろうが、さすがにつぶさに事情を知るほどは二人に近づけなかったらしい。

秋のけしきも知らず顔に(飽きてはいないと知らせるように、秋の風情をよそ見して)、青き枝の、片枝いと濃く紅葉ぢたるを(青葉を付けた枝の一部が真っ赤に紅葉したものに結びつけた文で、中納言はこう贈歌なさいます)、

「おなじ枝を分きて染めける山姫に、いづれか深き色と問はばや」(和歌 47-05)

「立ち枯れの 燃えることなき 浅ましさ」(意訳 47-05)

*注に＜薫から大君への贈歌。大君を「山姫」という。反語表現。自分の気持ちはもともと大君のほうにあるという意。『異本紫明抄』は「同じ枝を分きて木の葉のうつろふは西こそ秋の初めなりけれ」（古今集秋下、二五五、藤

原勝臣）を指摘。＞とある。「同じ枝(え)を分きて」は＜同じ木の枝の一部が＞。「木の葉のうつろふは」は＜紅葉するのは＞。「西こそ秋の初めなりけれ」は＜西側から変わり始めるので五行説で言う秋も西も金の属性という説明にかなっている＞。という理屈オチの句らしい。五行説は古代中国思想で、万物は（木・火・土・金・水）の五元素から成り立つ、という考え方、とのこと。ウィキペディアによれば、ざっと、木は成長源、火は熱源、土は栄養源、金は堅牢源、水は霊源、を言うらしく、季節の秋や方角の西は金の属性を持つとされている。また、「やまひめ」は大辞泉に＜山を守る女神。＞とあり、語用参照に「わたつみの神に手向くる山姫の幣(ぬさ)をぞ人は紅葉と言ひける」(後選和歌集・秋下)が示されている。が、この歌は私には難しい。川を染める山の紅葉が海へ流れ込む、という雄大な景観が何処かの名所にあるのだろうか。もし、そういう名所があるのなら、その風情を神話の厳かさに例えたように見えるが、そうでないなら、お手上げだ。さて、そこで当歌だが、「おなじ枝を」は、一本の枝で一部紅葉している木に準えた言い方だが、歌意では＜同じ姉妹を＞。「分きて染めける」は＜別の生き方にする＞。「山姫に」は「分きて染めける」ことを意図する立場にある＜主体者に＞であり、実際に山暮らしをしている＜姫に＞であり、そういう＜あなたに＞という言い方なので、薫君の意図する「山姫」は＜姉姫＞なのであって、姉妹双方の＜山姫たち＞ではないだろう。しかし、当事者の立場から逃避したい姉姫にしてみれば、この「山姫」を＜姉妹たち＞または＜妹君＞に思いたいだろうし、その場合は、「分きて染めける」を＜個別に生きている＞という客観状態の表現と取り、「いづれか深き色と」を＜姉妹のどちらが深い思いなのか＞とも読めるようになっているのが、なんとも紛らわしい。それでも薫君の意図で読むなら、この「いづれか深き色と」は＜落ち着いた緑(の出家生活)と激しい赤(の夫婦生活)と、どちらが意味深い色の生き方なのかと＞という意味なのだろう。「問はばや」は、「問ふ(問い掛ける)」の未然形＋条件提示の接続助詞「ば」＋判断を投げ掛ける係助詞「や」で、理屈としては＜問うとしたら、どうだろうか→問おうと思うのだが→問いたいものだ＞。ところで、此処で序でに気になるのが、条件提示の「ば」が活用語の未然形につく場合と已然形につく場合の文意の違いだ。先に、已然形に付く「ば」を見れば＜是をすれば彼はどうなる＞という言い方だから、この仮定構文は活用語の動作内容が作用した場合の対照体の結果予測を叙述する文意、と言えそうだ。で、未然形に付く「ば」は＜是をしてみたら是はどうなる＞だから、活用語の動作内容が動作主体に及ぼす影響予測または別視点での意味考察を叙述する文意、のように見える。

さばかり怨みつるけしきも(中納言殿は姫が逃げ隠れたことに、あれほど立腹していたように見えたようすも)、言少なにことそぎて(言葉少なく省いて)、おし包みたまへるを(あえて見せずにいらっしゃるのを)、「*そこはかとなくもてなしてやみなむとなめり(昨夜のことは、特にどうということもなく遣り過ごす心算らしい)」と見たまふも(と見えなさるのも)、心騒ぎて見る(姫は全てが失敗だったと心穏やかならず見るのです)。　*「そこはかとなくもてなしてやみなむとなめり」は注に＜大君の推測。昨夜の中の君との一件をうやむやに済ませてしまうらしい。＞とある。そう言われれば、確かにそうらしい気はする。特に、薫君が妹君と付き合わない、という文意に取れば、「止む」の語感の重さの収まりは良さそうだ。が、薫君の贈歌が妙に暗示的で思わせぶりで真意が掴み難いというのに、それに続く姫の反応も、このように主語と目的語を省いた曖昧な言い方では、読者には、少なくも私には非常に文意が見え難い。で、私なりに理屈を考えると、姫に対して贈られた中納言の歌を読んで、妹のことを心配する、という姉姫の偽善心は分かるものの、それだけではあまりに当事者意識に欠ける気がして、是は、自分が逃げ隠れて妹を代わりに立てたという昨夜の一件全体に付いて、中納言は問題にせず、無かったことにする心算らしい、と姫は考えて、事態は一向に好転せず、却って妹や中納言を傷付けただけだ、という後悔を覚えた、という文意に取って置く。

かしかましく(女房たちが喧しく)、「御返り」と言へば(御返事をと促し申すのを)、「聞こえたまへ」と譲らむも(「あなたがお書きなさい」と妹君に任せるのも)、*うたておぼえて(姉姫は非

常に心苦しく思われ)、さすがに書きにくく思ひ乱れたまふ(そうは言っても、この収拾の難しい事態に際しては、自分でもさすがに返事を書きにくく苦悩なさいます)。　*「うたておぼえて」は＜不都合に思えて＞だろうが、姫の認識では今の事態を自分の失敗と考えている筈なので、とても妹にこれ以上の負担は掛けられない、という自責感なのだろう。ただ、情事があったとするなら、妹君に手紙がある筈で、であれば当然に、妹君が返事をしなければ変であり、此処でそのことの有無だけは確認するというか、その事情だけは妹君から聞き出さないと、姉君にしても返事の仕様が無いように思えるが、その点はどうなっているのだろう。と言っても、情事の有無は寝台を片付ける女房たちには、その場の客観状況から窺い知れるのであって、この時点では既に情事が無かったことは姉姫にも分かっていて、だからこそ、薫君の手紙を姉は自分宛の物だと分かって、自分で返事を書く気になった、のだろう。尤も、中納言が姉妹のどちらかにと、手紙を差し出したとも思えず、初めから姉姫宛であったとすれば、その時点で情事が無かったことは明示されていた、とも言えそうだ。また蛇足だが、薫君が紅葉に処女出血を掛けてもいないことも、無実なれば自明だ。

「山姫の染むる心はわかねども、移ろふ方や深きなるらむ」(和歌 47-06)

「女心の切なさは、男心の頼りなさ」(意訳 47-06)

*注に＜大君の返歌。中君のほうに心を寄せているのでしょう、という意。＞とある。「移ろふ方や深きなるらむ」は、「移ろふ」が＜変化し続ける←作用させる←働き掛ける＞という意味だから、確かに中納言の気持ちを推測する、というよりも期待する言い方で、妹姫には中納言の方から言い寄って欲しい、と姫は言った心算なのだろう。であれば、この「山姫」は＜妹君＞を指すが、であれば、「そむるこころはわかねども」は＜妹の恋心は分からないが＞と言っていることになるのだろうか。いや、「山姫の染むる心」は「染むる」が他動詞「染む」の連体形なので、自動詞意の＜山姫が恋に染まる心＞という文意なのではなく、まして＜山姫が誰かを恋に染める意図＞なのでもなく、山姫とは即ち妹＜自身が恋する気持ち＞のことなのではないか。そして、「わかね」は「分く(分かる)」の未然形に完了意の助動詞「ぬ」の已然形が付いたもので、打消し意は「ね」に有るのではなく、「分く」の未然形「分か」の方に有るのであって、理屈では＜自分が分かるに至っていない＝本人は今はまだ分かってない＞という言い方であり、「山姫の染むる心はわかねども」は＜姉が妹の気持ちを分からない＞のではなく＜妹自身が恋を知らない＞という意味で、だから全ては＜あなた＝中納言＞次第だ、といっているのだろう。少なくも、姉姫はその心算で詠んだ、という筋が成立する詠み方、という作者の策文かと思う。が、薫君にとっては＜「山姫」＝姉姫＞であって、この歌は、姉姫が未熟な自分を導くのはあなた次第だ、と言っているように聞こえるのかも知れない。

*ことなしびに書きたまへるが(贈歌で問い掛けたことへの回答という事でも無さそうにお書きになっている姫の返歌が)、をかしく見えければ(中納言には思わせぶりな回答に見えてしまって)、なほえ怨じ果つまじくおぼゆ(逃げ隠れるほどの無礼がありながらも、やはり姉姫を憎みきれなく思えます)。　*「ことなしび」は「ことなしぶ(事無しぶ、事も無さそうぶる)」の連用名詞で＜事無げな態度＞ということらしい。が、「事も無げに」と言われても、それが＜簡単に＞なのか＜無頓着に、考えも無しに＞なのか＜特に意図も無く＞なのか＜その他で＞なのか、さっぱり分からない。また何で此処で、こんな分かり難い言い方をするのかも、さっぱり分からない。取り敢えず姫は、特別な強い思いも無く、フワッとした気分で、形式に則って一応の返歌をした、という文意あたりを考えてみる。確かに姫の返歌は、薫中納言の贈歌にあった「染む」「山姫」「深し」を踏襲して、返歌である事を先ずは形式を以て明示してはいる。その上で、ともかく妹を可愛がって欲しい、という気持ちを詠んだ、ようには見える。そしてそれ以上の、昨夜の混み入った事情にも触れず、贈歌に対する姫自身の回答も無く、そういう意味では確かに、特にどうということも無い返歌なのかもしれない。しかし、そ

の無頓着な返歌が、図らずも、中納言には姫の思わせぶりな回答に見えてしまう、という和歌独特の言葉遊びに乗って物語を語り進める、というこの作者独特の作文手法は、むしろ懐かしい。が、同一作者の健在振りかは、やはり強く疑わしい。などと混迷も深いが、それでも話の筋から言って、最も通りが良いのは＜贈歌の問いに対する答えも無く＞という文意だろう。が、もしそうなら、何故「ことなしびに」などという言い方をするのかが本当に分からない。が、此処では私は語感よりも筋を優先させたい。

「身を分けてなど(同じ故宮の血を身を分けて引いているからと)、譲りたまふけしきは(姉姫が妹君に中納言殿の受愛を譲りなさる意向は)、たびたび見えしかど(何度も見えていたが)、うけひかぬにわびて構へたまへるなめり(私が同意しないことに困って、姉姫は昨夜の妹君の身代わりを企てなさったようだ)。

そのかひなく(その当てが外れて)、かくつれなからむもいとほしく(このように余所余所しいままなのも残念で)、情けなきものに思ひおかれて(私は頼りないものに思われて)、いよいよ*はじめの思ひかなひがたくやあらむ(これでは、いよいよ以て八宮の意向に沿わず、宇治に通い始めた当初の出家心に背くことになりそうだ)。　*「はじめの思ひ」は＜姉姫との結婚＞かと思ったが、下文に「かばかりの世の中を思ひ捨てむの心に、みづからもかなはざりけりと、人悪ろく思ひ知らるる」とあって、「思ひ」は＜出家心＞のことらしい。非常に紛らわしく、分かり難い文意で、どうにも作者の説明不足に思える。

とかく言ひ伝へなどすめる*老い人の思はむところも軽々しく(いろいろと言い触らしているらしい弁の考えでも私は軽はずみで)、とにかくに心を染めけむだに悔しく(あれこれと姫の事を考えていたようなことさえ後悔され)、かばかりの世の中を思ひ捨てむの心に(このように信ずるに足りぬ現世を思い捨てようという出家心に)、みづからもかなはざりけりと(我ながら適わないことだったと)、人悪ろく思ひ知らるるを(姫への執着を見っともないと思い知られるが)、まして(まして)、おしなべたる好き者のまねに(よく居る風流人みたいに)、同じあたり返すがへす漕ぎめぐらむ（同じ相手に繰り返し言い寄ろうというのは）、いと人笑へなる*棚無し小舟めきたるべし(運河の周回船じゃあるまいし、実に無様な小者ぶりだ)」　*「老い人の思はむところ」は＜弁が考えるところ＝弁の見立て＞で、「かろがろし」は＜弁の考え＞に対して＜卑しい、軽率だ＞と言っているのではなく、「人悪ろく思ひ知らるる」に掛かる言い方で、薫君自身への弁の評価として＜軽はずみだ＞と言っている文意のようだ。　*「たななしをぶね」は波除け板の無い小舟ボートらしい。注には＜『源氏釈』は「堀江漕ぐ棚無し小舟漕ぎ返り同じ人にや恋ひわたりなむ」（古今集恋四、七三二、読人しらず）を指摘。＞とある。

など(などと中納言は)、夜もすがら思ひ明かしたまひて(夜通し考え明かしなさって)、まだ有明の空もをかしきほどに(まだ有明の月が出ている早い時間に)、*兵部卿宮の御方に参りたまふ(兵部卿宮のお部屋を訪ねなさいます)。　*「兵部卿宮の御方」は注に＜六条院にある匂宮の曹司に。＞とある。「おおんかた」は＜御部屋＞だろうから、薫中納言も六条院に住んでいる、ということなのだろうか。冷泉院に住んでいたかと思ったが、そう言えば冷泉院はどうしているのだろう。健在なら 53 歳だ。また、匂宮は二条院に住んでいるかと思ったが、今は六条院に居るらしい。良く分からない。